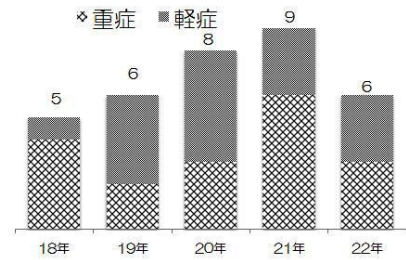


安全管理の「見える化」

当社の労働災害は右図のよう毎年5～9件発生しています。発生原因に設備的不備はほとんどなく、管理的問題と不安全行動・ヒューマンエラーがほとんどを占めています。

そこで「当り前のことが出来ない、危険に気付かない」などを防ぐため、管理者と作業員が常に「危険」を意識するよう「見える化」に取り組むことにしました。

労働災害発生件数（本社）



I 熱中症の「見える化」

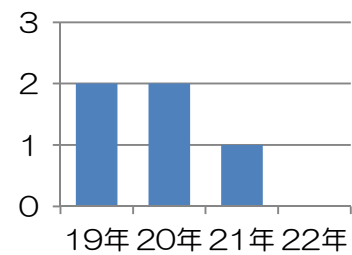
平成 19 年から 3 年間毎年熱中症が発生しました。2～1 件です。「まあしょうがないか」と言ってしまうまでです。何もしなかったわけではありません。全現場の全作業員に 1 人に 5 袋スポーツドリンクの粉末を置き、毎日のように「熱中症予防・水分塩分を補給しよう・健康管理をしましょう」などと朝礼で話をしていました。それでも起きていました。社員も掛かりました。

そこで、写真のように温湿度計をボードに取付けたものを全現場に配り、作業員がよく見えるところに取付けました。結果、平成 22 年に熱中症は発生しませんでした。

本当に温湿度計を取付けた結果なのかは、もう何年か継続実施する必要があります。

夏が暑いのはみんなが知っています。そして水分・塩分補給をしなければいけないことを知らない職人さんはいません。でも、熱中症になってしまいます。気の緩み・過信でしょうか。今、どれくらい熱中症の危険があるのか目で「見える」「見せる」ことで意識が違わないでしょうか。

熱中症発生件数



II 安全帯の「見える化」

平成 16 年から「あなたの安全帯は、安全ですか」を合言葉に安全帯の点検活動を始めました。表のような点検結果にもかかわらず、ほとんどの作業員は、「安全帯さえ使っていれば大丈夫」と思い込んでいるようでした。

点検総数	①問題無	構成比	②注意喚起	③早期交換	④使用停止	②～④計	構成比
500 本	325 本	65%	45 本	122 本	8 本	175 本	35%

②注意喚起：現時点では良いが、早めの交換が望ましい ③早期交換：部品の交換が必要 ④使用停止：即時使用停止（危険）

そこで、平成 20 年にある鉄骨建方中の現場の安全大会の一環として「安全帯のビジュアル教育」を実施しました。実験にかけた安全帯は、安全帯チェックの際に不良または早期交換と判定された安全帯を使用し、危機感が高まるよう工夫しました。目の前で実際に安全帯が切れるさまを見ることで、多くの作業員が認識を新たにしました。今回の実験結果を教育用の DVD としてまとめ、社員教育並びに職長・安全衛生責任者教育、リスクアセスメ



ント教育などで利用しています。また、協力業者へも配付し社員教育に利用するよう指導しています。その結果、安全帯への理解も進み、全体のレベルは向上しています。「安全帯さえ使っていれば大丈夫」から「安全帯も使い方を間違えると役に立たない」へ意識が変わっているようです。

Ⅲ 新規入場者教育の「見える化」

初めて現場に行く時どの道から行こうか迷うことはありませんか。あなたが通った道は、発注者や近隣との打合せと違っていませんか。

法的な通行規制とは別の現場独自の交通ルールを現場入場前に徹底するため「新規入場者の皆さんへ」に案内図をいれました。

また、共通のルール、作業所独自のルールを一枚の書類にまとめ事前に協力業者に提供し、送出し教育資料として使用するよう指導しています。

平成22年における現場入場後1週間以内の災害は不慮災害等を含めると実に67%をしめています。ルールを事前に知らせ、多くの時間を現場入場時の教育に割き、作業所の状況を詳しく説明し、新規入場者の災害が1件でも減ればと考えています。

平成22年 現場入場後経過日数

初日	1W以内	2W以内	1M以内	6M以内	6M超
4	4	1	1	0	2



Ⅳ 今後の取り組み

①カラーベストを着用し、合図者・誘導員・玉掛け・作業主任者等事前の作業計画で定めた役職者が誰なのか、パトロール員にも良く分かるようにします。また、チーム内での役割分担を徹底し、合図者が合図をしないで玉外しをするような事をなくしたいと思います。

カラーベストの着用



指差し唱和の徹底



②建設現場では依然として災害の約4割を墜落災害が占めており、その半分は低所からの墜落災害です。そこで脚立・足場・梯子作業時の指差し唱和項目を垂幕にして、安全広場等に掲示し毎朝のTBMを閉めるタッチアンドコールで唱和することにしました。

Ⅴ まとめ

「見える化」とは、当然のことながら、見えなかったことが「見える」だけです。「必要なのは、見えたものをどのように利用するか、見えることで何を改善すればいいのかを決め、実行することで。」「見える化」さえすれば災害事故・ヒヤリハットが減るわけではありません。

目的・目標を定め、そのための手段として、何をどうやって「見える化」すれば効果があるのか話し合い実行し、効果を検証してください。

我々の役割は、災害が発生した後に「見える」ものを災害が発生する前に「見える」ようにし、「見える化」の目的を徹底することです。